ハワイの海と日本の海：ハワイでカツオの一本釣り漁を行った日本の漁師さんの物語

小川真和子

ハワイの自然環境と人々の移住

皆さん，ハワイと聞くと，どのようなイメージが思い浮かびますか。青い海，澄んだ空，きらめく珊瑚礁でしょうか。それとも，まるでビーチ沿いに林立するかのようにホテルが立ち並んだワイキキのきらびやかな風景でしょうか。いずれにせよ，現在では，ハワイ，イコールビーチリゾート，のイメージがすっかり定着している感じがあります。しかし本日私が皆さんにお話しするのは，そのようなリゾートのイメージからは見えてこない，現地の人々の暮らしと海にまつわる物語です。

ここでまず，世界地図をご覧下さい。ハワイは広大な太平洋のほぼ中央に位置し，世界の五大陸から最も離れた場所にあります。それから，ハワイが列島であることにもお気づきと思いますが，一番南にハワイ島という島があります。そこは現在もキラウエア火山が活発にマグマを放出していて，そのマグマが冷え固まった真っ黒い岩で覆われた光景を目にすることができます。また列島を北西の方向の島に移動するに従って緑が濃くなるのですが，これは，ハワイの島々が海底火山の噴火と地殻変動によって形成されたためです。ですから，列島の北の方に位置するカウアイ島はハワイ島よりもはるかに歴史が古くて，島中がジャングルに覆われています。映画キングコングやジュラシックパークが撮影されたのもこの島です。

それでは次にハワイ周辺の海図をご覧下さい。島々がまるで深海になだれ込んでいるような状態です。周辺の海の水深は平均で数千メートル，最深部は約九千メートルもあります。ですから，海底部分を含めると，ハワイの山々はエベレストよりも高い，ということになります。また，ワイキキビーチなどで泳いだことがある方ならお気づきになったと思いますが，ハワイの海は意外と冷たいのです。これは，列島周辺を寒流が流れているためです。ですからハワイは珊瑚にとって住みにくい環境なので，珊瑚礁も八重山やグレートバリアリーフなどと比べて，あまり発達していません。

そのような独特の地理的条件があるハワイ諸島に人類が到達したのは，紀元 300 ～ 800 年ごろと考えられています。日本では既に平安京が誕生していましたが，その頃にポリネシアのマルケサス諸島から人々がダブルカヌー（双胴船）に乗って，高度な航海術を駆使しながら何十日間もの船上生活に耐えた末にハワイ諸島へやってきたと考えられています。このダブルカヌーには豚や鶏，飲料水やタロイモ，バナナなどの苗木も積み込まれていました。なお，ポリネシア人の赤ちゃんのお尻には現在も蒙古斑が見られることがあることから，この人々のルーツはアジアだと考えられています。恐らく日本人とも遠い親戚なのでしょう。そして人々はハワイ諸島とマルケサス諸島を何度も往復しながら，次第に前者に定着していきました。

やがてハワイの島々に居住するハワイ人たちは，王を中心とした自給自足の階級社会を築いていきます。男女一緒に食事をしてはいけないといった，数々のカプと呼ばれるタブーに彩られたハワイでは，自然の恵みに感謝しながら，自分たちが食べる分の食糧を確保する規模の漁業や農業に従事していました。海では珊瑚礁に生息する小魚だけでなく，沖に出てカツオも獲っていましたが，カプによって決まった時期しか漁撈は許されていませんでした。これはカツオがハワイ人の先祖の航海を案内した神聖な魚，と信じられていたためなのですが，実際には産卵期の乱獲を防ぐ意味もあったようです。

このようなハワイ諸島の存在が欧米に知られるきっかけとなったのは，1778年にイギリス人，ジェームズ・クック率いる船隊の到達でした。クック船長は先住民との争いによって命を落としますが，本国に帰国した彼の部下がハワイについての知見を欧米に広めたのです。これ以降，欧米は太平洋進出のための拠点として，ハワイに注目します。またハワイ側も，イギリス人の軍事顧問を雇い，イギリスから銃器を取り入れたカメハメハがハワイ諸島を統一し，1810年にハワイ王国成立を宣言しました。カメハメハ大王は西洋との貿易を促進する一方で，キリスト教の布教を禁止していましたが，王様も代が変わると，今度は王様夫妻自らがキリスト教徒になって古くからのカプを破ります。すると西洋から布教やビジネスチャンスを求めて宣教師や商人が次々とハワイにやってきました。

やがてその子孫はハワイに定住して砂糖キビ栽培を始めたのですが，その頃，ハワイ人は西洋人が持ち込んだ疫病などによって，人口が激減していました。似たようなことがアメリカ本土でも起きていて先住民の数が随分減りましたが，ハワイも例外ではなかったのです。そこで，砂糖キビプランテーション労働者を確保するために，1830年代以降，中国の広東から労働者を導入し始めます。この人たちはプランテーションの契約期間が終了すると，自分で商売を始めたりする人が多かったのです。また1878年以降はポルトガル人もプランテーションで働くためにハワイへやってきて，その多くは現場監督者になっています。さらにハワイでは，1850年に外国人の土地私有が認められるようになったことから，1890年までにハワイ全土の実に四分の三の土地が白人のものになります。その後はビッグファイブと呼ばれる五大白人財閥が台頭して，ハワイの政治や経済，メディアなどを独占的に支配するようになりました。もちろん，広大な砂糖キビプランテーションを支配していたのも，これらの財閥です。こうして，ハワイ王国の実権は次第にハワイ在住の白人の手に移っていきます。日本人が大挙してハワイへやってくる頃には，ハワイ王国の独立は風前の灯火のような状態となっていました。

日本人漁民のハワイへの進出

ハワイは現在も日系人が多く住んでいます。私の姓は小川ですが，ハワイ大学の大学院に通っていた頃，所属していたアメリカ研究学部にはオガワ先生がいました。アメリカに行くとなかなか日本語の名前をきちんと発音してもらえないことが多いのですが，ハワイだと，電話でオガワと言えば一発で通じてしまう。こんな州は他にはありません。そもそも何故，ハワイにオガワさんが多いのか，という問いに対する答えとして，多くのハワイ関係の書籍は1885（明治18）年の官約移民以降における日本人移民の流入を挙げています。官約移民とは砂糖キビプラ

ンテーションでの労働者確保のために，ハワイ王国と明治政府の取り決めによって始まった日本人移民のことです。その多くは広島県や山口県，熊本県，福岡県など西日本の出身者です。もっとも，それよりも先の明治元（1868）年に，日本の政権交代による政治の空白のどさくさに紛れるように149人の日本人がハワイへ渡っています。これらの人々は，いわゆる「元年者」と呼ばれたのですが，徳川幕府も明治政府も，この集団移住に関与していませんでした。また1901年以降は沖縄からも大勢の人々がハワイにやってきます。

このような日本人たちのハワイでの体験談として，これまで注目されてきたのは，砂糖キビプランテーションで苦労しました，という話ばかりです。でも，ここで私が指摘したいのは，この頃，ハワイへやってきた日本人移民の多くが沿岸部の出身で，農業だけでなく漁業経験者もけっこういた，ということです。このような人々の中には，プランテーションでの仕事が休みになると漁に出て，獲った魚を売り歩いて大もうけしたり，プランテーションでの労働など最初から興味がなく，契約期間の終了を待たずしてプランテーションから逃げ出して漁業を行ったりするような人もいました。

もっとも，ハワイの日本人移住者の多くはプランテーション労働者でしたし，漁業を専門に行っていた人は少なくて，曲がりなりにも日本人漁船の船団が形成されてくるのは20世紀に入ってからです。官約移民が始まった頃，多くの人々をハワイに送り出したはずの山口県周防大島や，そのすぐ近くにある沖家室（おきかむろ）島，そしてお隣の広島県の漁民が目指していたのはハワイの海ではなく，朝鮮海域でした。しかし，やがて朝鮮海域が瀬戸内海のみならず，九州各地から出漁してきた漁船でごった返す状態になってしまいます。ただでさえ競争が激しくなった上に，専業漁村の島だった沖家室島では，朝鮮海域に送り込んだ船団が遭難して多くの犠牲者を出す，という悲劇も起きました。そのような事情もあって他の出漁先を探し始めた時に目に付いたのが，ハワイの海だったわけです。またハワイの海には周防大島，沖家室，またそこからほど近い広島湾岸といった瀬戸内海からだけでなく，和歌山県からも多くの漁民がやってきました。和歌山県南部，いわゆる紀南と呼ばれる地域の人々は，明治時代に入るとオーストラリアの木曜島などに出漁して真珠貝を採るなど，大活躍していましたが，1901年の移民制限法，いわゆる白豪主義によって日本人がオーストラリアから閉め出されてしまいます。それでもオーストラリアに密航する人々はいたのですが，白豪主義の国ではいくら頑張っても経営者として成功できない，ということで，ハワイの海を目指す人たちも現れました。

さらに，20世紀に入る頃になると，日本人移住者の数が5万人と，当時のハワイの全人口の約40パーセントに達しただけでなく，それ以降も急速に日本人人口が増え続けます。ハワイの日本人は新天地でも米や野菜，魚を中心とした食生活を送っていました。そもそも漁業とは，あくまでも魚を買ってくれる，あるいは野菜や米などの食糧と交換してくれる人があって初めて成り立つ生業です。たとえ一人で一トンものカツオを獲ったとしても，そんな大量のカツオは一人で食べきれるものではありません。そのまま放置しておけば，ただの生ゴミになってしまいます。漁獲物はあくまでも商品ですから，それを消費するお客さんの存在が欠かせません。まだハワイに住む日本人人口が少ない間はたいして商売にならない，という事情もありましたが，獲った魚を買ってくれるお客さんの人口が増えたことによって，ハワイで漁業をすれば儲かる，という見込みに変わります。

ハワイにおける日本人漁業の発展とコミュニティーの形成

ハワイ王国では，1891年にリリウオカラニ女王が即位すると，彼女は衰退する王権の再興を試みました。しかしそれに反対するハワイ在住の親米派白人が，ハワイ駐在のアメリカ領事と手を組んだ上で米軍の力を借りて1893年にクーデターを起こします。その結果，ハワイ王国が滅亡してハワイ共和国が誕生しました。この経緯についても，詳しくお話しできればいいのですが，滅びゆくハワイ王国の悲哀というのは，実は現在のハワイ社会でも，深く刺さったトゲのような存在として残っています。また現在，ハワイ州旗として利用されている旧ハワイ王国国旗の片隅にユニオンジャックが入っているのですが，これはかつてハワイ王室がイギリスの力を借りて，伸張してくるアメリカの勢力からハワイを守ろうとしたことの名残でもあります。さらに1898年には，多くのハワイ人が反対する中で，ハワイ共和国がアメリカに併合され，その準州となりました。米西戦争に勝利したばかりのアメリカにとっては，太平洋の中央に位置し，アジアへの往復の際の中継地点となるハワイの地政学的な重要性を無視することなど出来なかったのです。

ハワイがアメリカ領土の一部となったことで，日本人の流れが少し変化します。ハワイからさらに米本土へ行く人々が現れ始めたのです。その一方で，ハワイ基本法の発効によってプランテーション就労における契約期間の縛りが廃止されたため，漁業へ転向する人々も増加しました。また高い操船技術と泳力を持った紀南などの漁民が，ハワイに寄港する船舶の船員としてやってきて，夜中に海へ飛び込んで陸に泳ぎ着き，そのまま住み着いて漁撈に従事する密航者もかなりいたようです。密航者はなかなか自分の体験を他人に語りませんから，その正確な数は今も分かりません。

このような人々を吸収しながら，ハワイの日本人漁船船団は拡大を続けましたが，それを快く思わない人々もいました。特にハワイの漁業はまだまだハワイ人が独占していましたし，それに加えて中国人なども漁撈に従事していました。それでも日本人漁民が持ち込んだ足が速くて効率の良い日本式漁船，ハワイではこれらは「サンパン」と呼ばれていたのですが，このサンパン漁船が次第に先輩達の漁船を圧倒していきます。そのため海上で日本人漁民がハワイ人から命を狙われたり，たとえ沖で嵐に遭遇しても港に避難させてもらえなかったりといった排斥を受けたりしました。新参者が古参からいじめられるのは，どこでもあったようす。しかしその一方で，海は日本人漁民が先輩漁民達から，ハワイならではの漁法その他，様々な海の知識を伝授される学びの場としても機能しました。たとえば，現在でも和歌山県南部を中心に「ケンケン漁」という，独特のルアーを用いた漁法が広まっていますが，これはハワイ人が日本人に，鳥の羽のついたルアーを教えたのがルーツだと言われています。その他にも，網漁をする際に潰したカボチャをエサとして使用するなど，日本人はハワイ人から多くのことを学んでいます。また知識の交換は双方向で行われていて，日本人が持ち込んだ投網もハワイで広く普及しました。さらにメンパチやシビ，アジなどの日本語の魚名が現地の言葉に付け加えられ，今でもハワイのスーパーで「aji」として売られていたりするなど，お互いに漁法や漁具を伝授し合い，魚に関する知識を交換することも盛んに行われました。ハワイ人漁民は，その漁船船団の規模こそ次第に日本人に圧倒されましたが，自給自足用の漁撈に従事する人々を入れれば，少なか

らぬ数の人々が漁撈に従事しつつ，現在に至っています。

ハワイ人などの先輩漁民と時に対立したり，一緒に仕事をしたりしながら，やがて日本人漁民は，同郷の魚行商人らとともに資金を出し合って，日本人漁業会社を設立します。最も古いものが，1907年に沖家室島からやってきた北川磯次郎と松野亀蔵らが中心となってハワイ島ヒロに設立したヒロ水産会社（Hilo Suisan Company）です。約80名の日本人漁民や魚仲買人，小売業者たちがこの会社の株を買って経営を支えたのですが，この会社は現在も健在で，松野亀蔵氏のご子息が社長を務めています。さらにホノルル市内にも，布哇漁業会社（Hawaiian Fishing Company），太平洋漁業会社（Pacific Fishing Company），ホノルル漁業会社（Honolulu Fishing Company）といった会社が次々に誕生しました。これらの会社の主な業務は，なんと言っても漁民のスポンサーとしての機能を果たすことです。当時，日本人はハワイの銀行からお金を借りることが難しかったため，会社が漁船を造るための資金を援助したり，必要な物資を調達したりしました。また，万一，漁船が遭難した場合も，会社の費用負担で救助活動を行っています。さらに，会社の建物内に鮮魚のセリを行う市場を設けて，鮮魚流通の拠点を用意しました。このような会社の経営には，日本人だけでなく，中国人も参加しています。これは民族の「分断統治」をモットーとし，エスニックグループを超えた連帯を作りにくい労務管理を行っていたプランテーションと異なるエスニック関係が，ハワイの水産業界で成立していたことを物語っています。

このような漁業会社を中核として，1920年代には日本人が漁業のみならず，流通，加工，製氷，また日本人船大工による造船業といった関連事業も含めた水産業全般において支配的な立場に立つようになりました。これは，白人五大財閥が牛耳るプランテーションの世界で，日本人労働者が従属的な地位に置かれていた事情と全く異なります。そもそも陸の支配者であった白人財閥は，海を利用するノウハウを持ち合わせていませんでしたから，海における日本人の活躍を排斥しようとしませんでした。むしろ，後述するように1930年代の日米関係の悪化に伴って，アメリカ連邦政府や海軍が日本人漁業を締め付ける方針を取ると，これらから日本人漁業を守ろうと尽力すらしています。これは「陸」での出来事ばかり気にしていては決して見えてこない視点です。

また，水産物の流通や加工で忘れてはならないのが女性の貢献の大きさです。日本では夫婦船（めおとぶね）や家船（えぶね）といって船上生活を送る人々などがいて，それらに乗り込んだ女性は男性とともに漁撈に従事したのですが，ハワイにはあまり女性漁民はいませんでした。しかし，夫や父親が獲ってきた魚を売る流通の現場で女性は大活躍をしています。日本人漁村の女性達は，魚を好むポルトガル系移民の地区など，日系コミュニティの外にも積極的に行商に出かけてどんどん市場を開拓していますし，魚市場の仲買人などとしても活躍しています。ですから，少し前にテレビで放映されていた缶コーヒーのコマーシャルで，魚市場と思われる舞台が出てきたときに，そこで働いている人々が全員，男性だったのを見て，私は強い違和感を覚えたものでした。この缶コーヒーは男性を意識して開発された商品のようでしたから，わざと「男臭さ」を表現したかったのでしょうけれど，実際，築地などの魚市場で働く人々は女性も多く，商売において大きく貢献しています。水産流通における女性の貢献の大きさは，昔のハワイでも現代の日本でも共通しています。

また，加工の現場でも女性の活躍は顕著でした。1922年に太平洋漁業会社の山城松太郎や日本人漁民が白人資本家と合同でハワイアンツナパッカーズ社というツナ缶詰工場を設立すると，日本人女性の労働力を動員しながら生産を拡大させていきました。そこでの賃金は他の職種と比較しても安く，工場内には悪臭が立ちこめて決して良い労働条件ではなかったにもかかわらず，多くの漁村女性が働いていました。それは単に収入を得るためだけでなく，夫や父親が常に不在がちという漁村特有の生活習慣から生じる，女性同士のネットワーキングの場として機能していたからです。漁村には，プランテーションで用意されていたような託児所はなかったのですが，隣近所の女性同士，互いに家事や育児を助け合いながら生活していました。

こうして，日本人漁村が大きくなるに従って，日本の漁村文化もハワイに定着し始めます。今も昔も「板子一枚下は地獄」ということわざが示すように，海での労働には危険が伴います。そのため航海の安全や大漁祈願をするための神様たちもまた，漁民たちと共に海を越えてハワイにやってきました。瀬戸内海で一番有名な海の神様と言えば，香川県の金刀比羅宮，いわゆる「こんぴらさん」ですが，誰かがハワイに持ってきた「こんぴらさん」のお札をお祭りした神棚の周りに，いつの間にか漁民やその家族が集まって祈りを捧げるようになる，その後，寄付を募って社殿を建てる，そんな感じで，20世紀初頭には金刀比羅神社がマウイ島やホノルル市内に何カ所も誕生します。また，同じく海の神様である「恵比寿さん」を祀る祠もホノルル市内に造られました。これらは，近代天皇制と密接に結びついた，いわゆる国家神道というよりも，海と深い関わりを持ちながら生活している人々の純朴な祈りから生まれた民間信仰と呼ぶべき存在です。これらの信仰以外にも，同郷の人々同士が集まって「八幡講」や「観音講」といった組織を作って，郷里の寺社仏閣に寄付金を送るといった活動をしています。

このように，漁村の人々は，ハワイ在住者同士で親睦を深めるだけでなく，故郷の漁村とのつながりも大切にしていました。インターネットが普及した現在と異なって，当時は郵便物を送るのにも時間やお金が今とは比べものにならない位かかったにもかかわらず，ハワイから故郷の親戚や友人に，写真や手紙を送ることも多かったのです。かつて私が沖家室島の空き家を調査した時に，二階の納戸のタンスの引き出しの中から，ハワイで撮影した家族の写真がたくさん出てきて驚いたことがあります。それらの写真を見ていると，若い独身者としてハワイへ行った島の男性が，現地で結婚し，子どもが生まれ，その子ども達がどんどん成長していく様子が見て取れます。なかなか会うことが出来ない故郷の家族に，せめて写真だけでもと，子ども達の成長の記録を送り続けていたのでしょう。また，現在も沖家室島には泊清寺という浄土宗のお寺があって，それはそれは立派な本堂があります。これも，ハワイや朝鮮半島，台湾など，海外に移住した島の人々からの送金によって建てられたものです。異国にあっても故郷を思う気持ちの強さを物語っていますね。

太平洋戦争と日本人漁村への打撃

太平洋を行き来した人やモノ，金銭などによるハワイと故郷の漁村とのつながりの強さを見るに付け，それを強制的に断ち切ることになった日本軍の真珠湾攻撃が人々に与えた打撃はどれほど深刻だったのだろうかと思わずにはいられません。この攻撃はハワイ時間の1941年12

月７日（日本時間８日）の早朝に始まったため，戦場と化したホノルル・真珠湾の沖では多くの日本人漁民が操業していました。日の丸を付けた戦闘機が漁船の頭上を飛び去ったと思いきや，しばらくすると今度はそれらを追撃するアメリカ軍の戦闘機がやってきて漁船に機銃掃射を加えた結果，何人もの漁民が命を落としました。たとえ無事に帰港できても帰宅は許されず，日本人漁民は直ちに移民局などの施設へ連行されました。そしてその後，ハワイの海を知り尽くしていた漁民の多くは，「国防上の理由」によって，ハワイ諸島各地やアメリカ本土の強制収容所に送られます。

実は日本人の繰る高性能な漁船がハワイの海を行き来することについて，アメリカ海軍や政府高官，とりわけフランクリン・D・ルーズベルト大統領は快く思っていませんでした。要するにこれらの人々は，漁船と日本軍の艦船を同一視しただけでなく，漁民が日本帝国のスパイとして活動するのではないか，と疑っていたわけです。そのため日米関係が悪化する 1930 年代に入ると，連邦政府や海軍は日本人漁業に対する規制を強めていきました。もっとも，ハワイ準州政府や歴代知事，さらに先ほども述べたように白人財閥でさえ，食糧自給率が低いハワイ諸島において，日本人漁民は貴重な蛋白源である魚介類の提供者であるとして保護していました。しかし，日本との戦争が始まると，海軍はただちに全ての漁撈を禁止し，漁船を没収してしまいます。そしてカツオ漁船など大型のものは改良を加えて海軍のパトロール船などとして利用する一方，小型のものはホノルル市内のアラワイ運河などに係留し，朽ちるがままにしてしまいました。

そのため，ハワイの漁業は壊滅状態となります。目の前の海に多くの魚介類が生息しているのにも拘わらず，ハワイの人々はアメリカ本土などから輸入したイワシやサケの缶詰を食べることを余儀なくされたわけですが，そのような現状に公然と異議申し立てを行ったのが，先述したハワイアンツナパッカーズ社でした。日米人合同出資によって設立され，日本人漁業と密接な付き合いがあったこの会社は，開戦と漁業禁止によってツナ缶詰の材料となる近海物のカツオを獲ることが出来なくなったため，兵器工場として営業を続けていました。その一方で，漁業を再開させるべく，同社はあれこれ画策します。開戦からわずか 9 日後には，開戦直後から準州政府に代わってハワイを統治していた軍政部へ向けて，漁業再開のための具体的なプランを提出した結果，同社関係者は軍政部食糧局漁業コーディネーターとして，また 1942 年 11 月以降は食糧局漁業部副コーディネーターとして漁業行政を担当することになりました。興味深いことに，ハワイ軍政部資料やアメリカ合衆国公文書記録管理局（United States National Archives and Records Administration, 通称 NARA）所蔵の連邦政府関連部局資料のどこにも，この会社と日本人漁村とのビジネス上，あるいは人的なつながりを思わせる記述が見当たらないのです。その上で，ハワイアンツナパッカーズ社は，軍政部に繰り返し日本人漁民の漁業再開を提言し続けました。軍政部は終戦直前の 1945 年 7 月まで，日本人はもとよりその子孫の漁撈も認めようとしないなど，海における日本人の存在を警戒し続けましたから，同社は意図的に日本人との関係を公の立場から見えにくくしていたのかもしれません。

戦後におけるハワイ漁業の復興と沖縄漁民の流入

1945年8月15日（日本時間）に太平洋戦争が終結すると，米本土やハワイ諸島内で強制収容されていた漁民が次々に帰還します。また，没収されていた漁船も，少しずつですが返還されました。期せずして4年間の「禁漁期間」を設けることとなった結果，ハワイの海は魚であふれる状態になっていましたし，長い間，缶詰の魚ばかり食べさせられていた地元住民は新鮮な魚に飢えていましたから，漁民は魚を獲れば獲るほど儲かりました。そのため，1940年代後半から50年代初頭にかけて，ハワイの漁業は活況を呈したのですが，その状態も長くは続きません。その大きな原因は後継者不足です。実は，ハワイ生まれの二世達は，たとえ収入が高くても，父親の職業を継がずにホワイトカラーの仕事に就く傾向が1930年代から顕在化していたのです。漁船では，新参者が通常，最もきつい仕事をこなさなければなりません。そうやってベテランから漁撈技術を体得することを要求されるのですが，そんなことをしていたら若者が逃げてしまう，水産学校を設立して科学的なトレーニングを施すべきだ，という動きが1930年代にあったものの，結局，何ら有効な手段が取れぬまま親世代が次々と引退してしまいました。

そこで，山口県沖家室島出身で，戦前に水産物を扱う大谷商会を設立してハワイ最大の商業施設であるアアラマーケット（A‘ala Market）を運営するなど，ハワイの水産界における大物でもあった大谷松治郎という人物が動きます。彼は戦時中，米本土の強制収容所に送り込まれていましたが，戦後，ハワイへ戻ると早速水産業の復興に尽力します。戦時中に倒産した漁業会社の関係者を集めて1947年に共同漁業という会社を立ち上げ，1951年にそれが解散すると，翌年にはユナイテッド漁業会社を設立して，その社長に就任しました。そして，長年，大谷の会社の顧問を務めていたウィリアム・H・ヒーン（William H. Heen）ハワイ準州上院議員を伴って三度来日し，外務省に対して日本人漁民をハワイに招き入れるべく再三にわたって交渉しますが，失敗に終わりました。なぜ外務省がこの申し出を断ったのかは不明ですが，恐らく，当時の日本もまた，戦後における漁業復興の真っ最中であったこともあり，貴重な労働力を削ぐことに対して慎重な態度を取らざるをえなかったせいかも知れません。

大谷松治郎が日本を訪問している頃，1953年に4人の漁民が沖縄から米軍機でホノルルにやってきました。この頃の沖縄は，日本本土から切り離されて，琉球列島米国民政府（U.S. Civil Administration of the Ryukyu Islands, 以後 USCAR）の統治下に置かれていました。戦後の冷戦体制において「太平洋の要石」と見なされた沖縄では，住民の意識を日本から切り離し，日本人とは異なる固有民族としての意識の醸成と，親米化の促進を軸とする文化政策が展開されます。そうすることによって，沖縄各地の米軍基地建設をスムーズに実現するだけでなく，本土復帰の動きを牽制しようとしたのです。そのため，特に沖縄からの移民を多く抱えるハワイは，「親米的琉球人」の育成のために有望視され，双方の間で大規模かつさまざまな人的交換・交流プログラムが始まっていました。そのような動きの中で，ホノルルで漁業に従事する新里勝市とその友達の保険業者，安里貞雄が，自費で新里の故郷である沖縄本島金武湾に浮かぶ島，平安座（へんざ）とその周辺から4人の漁民をハワイに招いたのです。新里は山口県や，広島県，和歌山県出身者が圧倒的多数を占めるハワイの漁業で成功し，戦後は大谷松治郎のユナイテッド漁業の副社長に就任する傍ら，新たに漁船を次々と造船してホノルル船主組合長となるなど，ハワ

イ水産業界の指導的立場に立っていた人物でした。平安座は戦前，沖縄本島における海運の中継地点として栄えていましたが，戦後に陸上交通が主流となるにつれて，それまで島の経済を支えてきた海運業が衰退し，離島という地理的条件ゆえに沖縄経済において周辺化され，離島苦に苦しんでいたのです。その故郷の実情に心を痛めた新里は，招き寄せた 4 人に住居を用意して漁業を教え，帰るときには漁具一式を手土産に持たせました。

この漁業研修プログラムは，一度限りで終了してしまいます。いくら成功者とは言え，新里ほか数名の漁民の好意によって行われる個人的な活動には限界があったのでしょう。また，1959 年に USCAR の肝いりで大規模な琉布ブラザーフッドプログラム（Ryukyuan-Hawaiian Brotherhood Program）が始まり，1972 年に終了するまでに 1000 人を超える人々が沖縄からハワイへやってきて，ハワイ大学などで専門的な知識や技術を習得したのですが，農業研修もこのプログラムに組み込まれていて，1972 年までの間に毎年 9 名から 31 名がハワイで研修を受けました。その一方で，漁業は当プログラムの対象から外れていました。

琉布ブラザーフッドプログラムに漁業が含まれなかった理由はよく分かりませんが，それでも新里勝市は，大谷松治郎やハワイ沖縄人連合会（United Okinawan Association of Hawaii）の前会長である仲嶺真助らにも呼びかけて，新たな運動を始めます。 漁業の振興による故郷の救済に加えて，大谷が目指すハワイの漁民不足の解消というもう一つの目的を掲げて，彼らは米軍が深く関与する農業研修と異なる漁業研修制度を立ち上げたのです。あくまでも教育活動の一環とされ，無報酬の参加で滞在期間も半年間だけだった農業研修と異なり，漁業の場合は操業成績の如何にかかわらず，毎月 100 ドルを最低賃金として会社が支払うこととし，研修期間も 3 年間としました。また農業研修生が米軍機によってハワイまで無料で往復し，ハワイでの生活が全て現地の沖縄系住民によって無償で賄われたのに対して，漁業の場合は参加者が飛行機代，部屋代，食費その他の必要経費を自分で負担することとしました。

この漁業研修計画の実現のために，大谷や新里のような，戦前から水産業界で活躍する世代だけでなく，大谷の次男の明やユナイテッド漁業社員のフランク後藤など，若い二世が日英両語の能力を生かして，沖縄，ハワイ双方の政財界や団体と交渉を行いました。特に明は戦後，GHQ ／ SCAP（General Headquarters/Supreme Commander for Allied Powers）将校として日本に勤務した経験を持っており，USCAR 側にも知り合いが多く，そのコネをたどっての交渉は実を結び，1961 年から 63 年にかけて，合計 30 人の研修生が空路ホノルルへと向かいました。そのうちの約 20 名は平安座，糸満，そして那覇出身者で，年齢も 20 歳代後半から 30 歳代と，名目上はハワイで漁業を学ぶ研修生とはいえ，一人前の漁撈技術を持つ人々がハワイで即戦力として役立つことを期待されていたわけです。

このような漁業研修生制度は，1965 年に合衆国が新移民法を成立させて，アジアへ広く門戸を開くと，漁業移民の受け入れへと形を変えます。また，その頃にハワイアンツナパッカーズ社に所属するカツオ漁船が，ユナイテッド漁業に倣って沖縄から漁民を導入し始めたので，優秀な人材の取りあいとなりました。そこでユナイテッド漁業，ハワイアンツナパッカーズ社双方とも，直接，関係者が沖縄へ出向いてリクルートするだけでなく，その知人や親族など，さまざまな人脈を用いて人を集めました。漁業経験の有無も厳しく問わなくなったため，素人のタクシー運転手さんなども大勢，ハワイへ向かいます。それにしても，漁船に乗ったこともな

い人がどうしてハワイへ行ったのか，と言うと，この仕事が儲かったからです。この点については後でまたお話しします。

それ以外にも，1970年代に沖縄からハワイへ渡った世代になると，経済的理由以外の目的を持っていた人々がハワイの海に登場します。この世代は戦後生まれで，戦時中の悲惨な地上戦や戦後直後の食糧難の記憶はありません。また1971年にアメリカのガルフ社が平安座に石油貯蔵基地を建設する代わりに，平安座と沖縄本島を結ぶ海中道路を建設したことで，島は本島と陸続きとなって離島苦から解放されました。しかし，たとえば平安座生まれで1975年に漁業移民としてハワイへ行った伊藤博文さんは，島で働く気がなかったといいます。もっと広い世界が知りたかったためにハワイを目指したのだ，という伊藤さんは，「自分探し」のために留学する現在の大学生と意識の上では大して変わりません。平安座は昔からハワイなど海外に多くの移住者を送り込んだ経緯がありましたし，オーストラリア海域は荒れるけれどマグロがよく獲れて儲かるといった話を，島の若者は先輩達から聞かされながら育っています。若いうちは冒険するものだ，と言って19歳でハワイに向かった安次富保（あしとみたもつ）さんもまた戦後生まれです。ですから，生活苦など，やむを得ない理由を抱えて移民する，ディアスポラ（diaspora）という概念の底に流れる先入観に囚われていては，海に向かって開かれた島の人々の感覚を理解することは難しいのです。

試練の場としてのハワイ

さて，平安座からハワイへやってきた伊藤さんの話に戻します。彼がハワイの漁船に見習いとして乗り込んで最初の一週間が過ぎ，初めて船頭（船長）から渡された給料袋は，札束のあまりの厚さに「立った」そうです。今風に言うと，いきなり100万円くらい渡された感じでしょうか。とにかくハワイの海は桁違いに儲かったと，ハワイで漁業をした沖縄の皆さんは口をそろえます。毎月100ドルどころか，もっともらっていたわけです。そのお金をしっかり沖縄の家族に送金して，故郷に御殿を建てたような人もいるのですが，特に若い独身男性の中には，いきなり手にした大金のせいで，人生が暗転してしまう人も出てくるわけです。稼ぎを酒に費やすあまり過度の飲酒に走った結果，アルコール中毒となって無一文となってしまい，帰国するお金も無くなって妹さんが迎えに来た，とか，ハワイで愛人を作って故郷の妻子を顧みなくなってしまったため，残された妻子が苦労した，とか，「成功談」の陰に隠れた人間臭い失敗談も，私は平安座や糸満でずいぶん聞きました。

そのため，ユナイテッド漁業では研修生の給料を強制的に貯金して沖縄に送り，小遣いとして毎月20ドルだけ渡すようにしていました。それでは足りずにもっともらおうとすると，フジコさんという二世のおっかない出納係から「あなた，そのうち平安座に帰るんでしょう」とこっぴどく叱られたそうです。自分のお金なのに使わせてもらえなかったと，今でも恨み節をたれる元研修生がいますから，よっぽど怖かったのでしょうね。でも，フジコさんにしてみれば，ハワイで浪費してしまう若者達を一生懸命たしなめていたのでしょう。その一方で，ハワイアンツナパッカーズ社では，給料を全額渡していました。また，住む場所も，ユナイテッド漁業は寮を提供していたのですが，ハワイアンツナパッカーズ社の漁船で働く人は自分で住居を探

すことになっていたので，大抵は同じ出身地や同じ漁船に乗り込む者同士で一軒家などを借りて共同生活をしていました。

どちらの会社の労務管理が良いのか，私には判断しかねますが，いずれにせよ，ほとんどの沖縄の漁民はよく働きました。「あの時はあなた達が来てくれて，本当に助かりましたよ」と大谷明さんが後に元研修生に語っていたように，彼らの活躍が，ハワイにおける漁民不足の解消に大いに役立ったのです。英語が分からないだけでなく，山口県や広島県系の人々が話す独特の方言が，沖縄の人には理解しがたいといった「言葉の壁」に悩まされたり，漁業未経験者がハワイの海特有の大きくうねる波のせいで船酔いに苦しんだりといった苦労もたくさんしています。それでも現在では，皆さん口をそろえてハワイは楽しかった，沖縄ではソーメンチャンプルばかり食べていたのに，ハワイでは特大ステーキや巨大なエビフライにありつけた，と食べものの豊かさに言及するのは面白いです。

その後のハワイの漁業

1980 年代になると，ハワイアンツナパッカーズ社が倒産します。この会社はハワイの海で獲れるカツオを材料に使ってツナ缶詰を製造していたので，製品の味はとてもよかったそうですが，そのせいでしょうか，国内外のライバル会社との価格競争に負けてしまいます。ハワイアンツナパッカーズ社の倒産によってカツオ鮮魚の需要が一気に下がっただけでなく，ハワイではその頃から不漁に悩まされるようになっていました。そのため，沖縄の漁民は続々と故郷に戻ったり，漁業を辞めて寿司屋などに転業したりしてしまいます。日本式のカツオ一本釣りサンパン漁船も，2014 年まで「二世」という船が一隻だけ操業していたのですが，もう引退してしまいました。その一方で，ベトナム系や韓国系などの漁民が増え，今ではハワイの海はすっかりマルチ・エスニックな環境になっています。このままいくと，100 年以上前に日本人が持ち込んだ漁業文化は消滅してしまうのでしょうか。

たとえ和船をモデルとしたサンパン漁船を繰ってカツオ一本釣り漁業に従事する，といった漁撈スタイルが無くなっても，日本式の漁業文化は変容しつつ 21 世紀のハワイを生き抜くのではないか，と私は楽観的に見ています。そもそも海を生活拠点とする漁民は，農民と異なって，土地への執着がはるかに少ないのです。目の前に横たわる海が儲かればやって来ますし，儲からなくなれば，さっさとよそへ移動します。日本人漁民の姿がハワイから消えるのは漁民の性の故でもあります。昔ほど儲からなくなったのですから。それでも大谷松治郎が設立したユナイテッド漁業は，現在もハワイ，いや，アメリカで唯一のセリ市場を抱える水産物流通拠点として機能していますし，スーパーマーケットの出現で消えたと思われた漁民のおかみさん達の魚の行商も，天秤棒でカゴを担ぐスタイルからピックアップトラックに商品を積んで売り歩く形に変わっただけで，相変わらず固定客をしっかりとつかんでいます。また，日本人が持ち込んだ「こんぴらさん」ことハワイ金刀比羅神社も，戦後に敵性財産として連邦政府に不動産を差し押さえられましたが，日本人漁村が中心となって裁判を起こして取り戻しています。今でもこの神社は，ハワイに寄港する日本の漁船や海上自衛隊の艦船など日本の船舶関係者だけでなく，地元のプレジャーボートやヨットの持ち主なども訪れて海の安全を祈る場としての役割

を果たしています。まさに，人種やエスニシティを超えて，海を愛する地元の人々から広く受け入れられているわけです。

そろそろ時間のようですから，私の話はこの辺りで終わりとします。いずれにせよ，ハワイの海と日本の海の文化や人々の暮らしが，実は100年以上の間，密接なつながりを持ち続けていたということについて，少しでもお分かりいただけたのであれば幸いです。もし皆さんがこれからハワイを訪れる機会があったら，是非，ホノルル湾のピア38にあるフィッシングビレッジを訪れてみて下さい。ここは「ハワイの築地」を目指していて，築地より遙かに規模が小さいものの，早朝にはユナイテッド漁業のセリ市場を見学したり，お昼や夜にはシーフードレストランでハワイの新鮮な魚介類を味わったりすることができます。もちろん，ハワイ金刀比羅神社の参拝も欠かせません。ホノルル国際空港からワイキキへ向かうH1フリーウェイを走っていると右手に鳥居が見えてきますから，それを目印に行ってみてください。ちなみに金比羅さんのお隣にはハワイ太宰府天満宮の社殿が鎮座しています。同じ境内に異なる神社が同居しているというのは，いかにもハワイらしい光景です。そして美しい海を眺めながら，かつてこの海を生業の地として縦横無尽に駆け巡っていた日本人がいたことを，どうか思い起こしてください。

参考文献

岡野宣勝 . 2007.「占領者と非占領者のはざまを生きる移民―アメリカの沖縄統治政策とハワイのオキナワ人」『移民研究年報』13: 3 － 22頁。

拙稿．2012.「戦後ハワイにおける沖縄の漁業者を対象にした漁業研修ならびに漁業移民制度の展開」『移民研究年報』18：85 － 100頁。

―――．2013.「太平洋戦争中のハワイにおける日系人強制収容－消された過去を追って - 」『立命館言語文化研究』25：105 － 118頁。

―――．2015.「戦前のハワイにおける水産業の発達と日本人漁村の生活」米山裕・河原典史編『日本人の国際移動と太平洋世界』文理閣：190 － 220頁。

―――．2015. *Sea of Opportunity: The Japanese Pioneers of the Fishing Industry in Hawai'i*. Honolulu: University of Hawai'i Press.

―――．2015.「ハワイ準州における対日本人漁業政策－ 1930年代から40年代を中心に」『地域漁業研究』56：87 － 118頁。

後藤明．1989.「ハワイ日系移民の漁具と南紀地方のケンケン漁法」『民具研究』84：5 － 6頁。

国立民俗博物館編．2007.『オセアニア海の人類大移動』昭和堂.

Bester, Theodore C. 2004. *Tsukiji: The Fish market: The Fish Market at the Center of the World*（Berkeley: University of California Press）. = テオドル・ベスター，和波雅子・福岡伸一訳『築地』木楽社，2007年.